

【論文】

多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育 —中国大連市における第二外国語としての日本語教育—

加 納 陸 人

Japanese Language Education
as Social Catalyst for Multi-cultural Co-existence:
The Teaching of Japanese as a Second Foreign Language
in Dalian City, China

KANO, Michihito

要旨：中国大連市の中学校では、2006年より第二外国語としての日本語教育が実施されてきたが、本稿ではその日本語教育を概観し、目的や意義について述べる。その中でも日本語教育の理念として打ち出された「人間関係の温暖化」と「多文化共生社会の尊重」について触れ、大連の中学生が21世紀の地球社会で生きていくうえで必要とされるキー・コンピテンシーを上げる。

また、ストーリー漫画を取り入れた日本語教科書『好朋友』の作成意図や構成、さらに人間関係を紡ぐ表現例などを挙げ、どのように学習動機が高められ、文化学習にも効果があるのかを考察した。そして、今後、第二外国語としての日本語教育がどのような役割を果たしていくのかを展望する。

キーワード：第二外国語としての日本語教育、人間関係の温暖化、多文化共生社会の尊重、『好朋友』、キー・コンピテンシー

1 第二外国語としての日本語教育開設の背景

1-1 中等教育における第一外国語としての日本語の位置

大連市は歴史的に日本とも関係が深く、日本語教育の環境が整っている。

現在3,000社を超える日系企業が進出しており、日本と密接な経済関係を築いている。

2009年の国際交流基金の調査¹によると、世界の日本語学習者は約365万人である。そのうち中国の日本語学習者は約83万人で、22.4%を占めている。前回（2006年）の調査と比べ約15万人増加している。しかし、初等・中等教育の学習者は65,532人で、前回（前出）の調査より約1万4,000人減少している。中等教育の学習者の地域は東北三省（黒龍江省・吉林省・遼寧省）、内モンゴル自治区に集中し、その地域で全体の77.6%を占める²。

中国における中等教育の第一外国語（以下、一外）としての日本語学習者は1970年代前半には、約30万人に達していた。しかし、その後、英語教育に押され、減少の一途をたどっている。筆者は1996年から2002年まで東北三省・内モンゴルの中等教育日本語教師研修に携わったが、年を追うごとに日本語クラスが廃止されることへの不安を訴える教師が多くあった。日本語クラスが減少している主な要因は、日本語から英語に切り替えた学校が増えているからである。英語を学習する背景として以下が考えられる。

- （1）英語は国際共用語であり、コンピューター使用には英語が必要である。
- （2）大学によって入試の外国語科目が英語に指定され、日本語で受験できず、進学先の選択肢が狭められた。
- （3）小学校に英語教育が導入されるようになった。

（1）については特に生徒の保護者の希望が強いといわれている。瀋陽市のある中学校校長の言によると、自分の子供が日本語クラスになると、親が学校に押しかけてきて英語のクラスに変えてほしいと要求されるといふ。一方、大連市の中学校長は自分が中学、高校と日本語を学習し、現在、コンピューターを使用しているが、英語を勉強しなかったことで特に不自由を感じていないことを保護者に話し、日本語学習を勧めている学校もある。

- （2）については中国の大学受験にあたる「普通高等学校招生全国統一

多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育—中国大連市における第二外国語としての日本語教育—
考試」(以下、高考)の外国語は、英語、日本語、ロシア語、フランス語、
ドイツ語、スペイン語のうち、一つを選択しなければならない。しかし、
大都市の一流大学や南方の大学では英語を指定するところが多く、大学や
学部によって日本語では受験できないケースがある。学歴社会の中国では
その影響は大きいといえるだろう。

(3)は2000年に開催された「2001年度教育工作会議」で小学校3年か
ら外国語を設置することが決まり、都市部では2001年から、それよりも規
模の小さい鎮や郷では2002年から英語が導入された。

大連市で日本語教育を受けた多くの卒業生は、市の経済建設に大きく貢
献し、日本語教育もある程度の地位を確立してきたが、上記の影響を受け、
日本語クラスの廃止や縮小が進んだ。中等教育で日本語を学習している生
徒は全市の生徒総数の約1%前後に落ち込んだ。

1-2 大連市教育局による日本語教育奨励策

前述の状況の中で2005年10月、「(財)国際文化フォーラム」(以下、TJF)
の招聘で遼寧省教育代表団が来日した。滞在中、TJFは同行した大連市教
育局副局長と今後の日本語教育について相互理解を深めた。この来日がき
っかけになり、大連市における日本語教育の奨励につながっていった。

…大連市における今後の日本語教育の展望や日中間の学校交流の可
能性について意見交換をしました。副局長、TJFが中国の日本語教育
と同時に日本の中国語教育を促進してきたこと、学校、教師、生徒と
の交流を通じて、日中の若い世代間の相互理解の促進をめざしている
ことに賛同し、大連市の日本語教育を見直すことを約束して帰国しま
した。

(TJF 2008『ことばと文化Ⅱ 小中高校生相互理解をめざして 国
際文化フォーラム20年の歩み』より p152)

副局長は帰国後、大連での日本語教育の環境づくりに着手し、同年11月末に大連教育学院内に「日本語教育学習センター」を設立した。本センターにこれまで指導主事に相当する教員を配置し、小中高の日本語教育を支えてきている。

さらに、2006年4月、大連市教育局は「小中高における日本語教育の強化に関する教育指導意見³」を通達した。これは2006年度の新学期より、すべての中高校で日本語教育を開設することを目標に、中学から逐次導入していくものである。また、英語中心の教育の中で日本語やその他の外国語を保護し、中高校で英語学習が困難な生徒に、もう一つの違う外国語を学ばせることを求めている。

上記の通達文書の「日本語の教学を推進させるストラテジー」の中に以下のことが述べられている。

各中学校は自身の実際の状況と結びつけ、英語科目の基礎の上にたち、適当な数の日本語クラスを開設してもよい。英語の基礎の遅れをある程度満たし、日本語を学ぶ生徒の学習要求を進んで改めていってほしい。中学校は国の「日本語課程標準」に照らし、学校、学生の実際と結びつけ、日本語の校本課程⁴を開発し、一部の生徒が「英語課程標準」の要求に達すると同時にもう一つの外国語の需要を満たし、日本語を英語以外に身につける第二外国語として必要とする。(原文中国語、筆者日本語訳)

また、日本語を導入していく上での奨励政策として、日本語で高校受験をした生徒に対する優遇措置、日本語を開設した学校への日本語教師の配置、国外研修などで教師養成を行い、さらに、教学研究会や市レベルの日本語コンクールや展示活動などを実施していくものである。そして、上記の政策を進めるために大連市教育局は、市政府の許可を得て「日本語教育専用資金」の予算化を実現させた。日本語教育専用資金の主な使用用途は

多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育—中国大連市における第二外国語としての日本語教育—

以下である。

- ・第二外国語教科書『好朋友 -ともだち- 試行版』（以下、好朋友）の発行費用
- ・教師研修の充実、訪日研修の実施
- ・日本語教育の特色校の認定
- ・教師標準・学習者標準の策定
- ・校長の訪日視察や生徒間の交流促進

1-3 大連市における第二外国語としての日本語教育

2006年9月の新学期より第二外国語（以下、二外）としての日本語教育が導入された。大連の中高校での日本語教育の形態は、一外としての日本語教育、英語と同時に日本語も学習する双語教育が存在しているが、二外としては全国に先駆けて導入された。

同年9月、日本語を実施している中学校は、大連教育学院の調査によると、一外、二外を合わせると26校で、学習者は4,620名、そのうち二外を実施している中学校は12校、1,988名である。2007年11月には29校、8,262名に増え、二外を実施している学校は27校、5,000名以上にもなった。一外の実施校はあまり変化が見られなかったが、二外の数が大幅に増えた。2008年4月には32校、8,269名で、そのうち二外の実施校は27校、学習者数は5,205名である。この数は中学における二外の日本語教育の可能性を秘めているのではないだろうか。

2. 二外としての日本語教育の意義

中国の義務教育における外国語教育は、教育部が策定した課程標準がその教育の指針を表し、その精神や理念に基づいて教育が実施されている。二外の日本語教育においても一外の日本語教育の精神と密接な関係を持つ。しかし、これまで二外の日本語教育については、中国ではほとんど触れられてこなかった。本章では二外の日本語教育の持つ意義について考える。

2-1 一外の日本語教育のめざすもの

中国はこの10年間教育課程の改革が進み、外国語教育においても大きく変わってきた。2001年に中国の義務教育における一外の指導要領『日语课程标准(实验稿)⁵』(以下『標準』とする)が刊行された。『標準』は「素質教育⁶」に重点をおき、これまでの「受験教育」や「暗記型教育」ではなく、各生徒の資質を伸ばしていくことをめざしている。また、創造的な精神を伸ばし生徒の国際的な視野を養うことにも触れており、『標準』の課程の性質の中で以下のことが述べられている。

日本語課程は、生徒が教師や同級生との共同活動を通じて、一歩ずつ日本語の知識と技能を身につけて、初歩の日本語によるコミュニケーションを習得するだけでなく、生徒が意志を練磨し、思惟を成長させ、感情態度を陶冶し、視野を広げ、生活体験を豊かにし、個性を伸ばし、人文的な素養を高めていく過程でもある。

(『日语课程标准(实验稿)』2001、課程教材研究所の日本語訳による p1)

さらに『標準』では、自主的な学習能力や文化的な素養を身につけること、初歩的な「総合言語運用能力」の形成をめざしている。総合言語運用能力とは、図1にあるように「言語知識」「言語技能」「文化素養」「感情態度」「学習ストラテジー」の五つの要素を結びつけ総合的に形成していくことである。

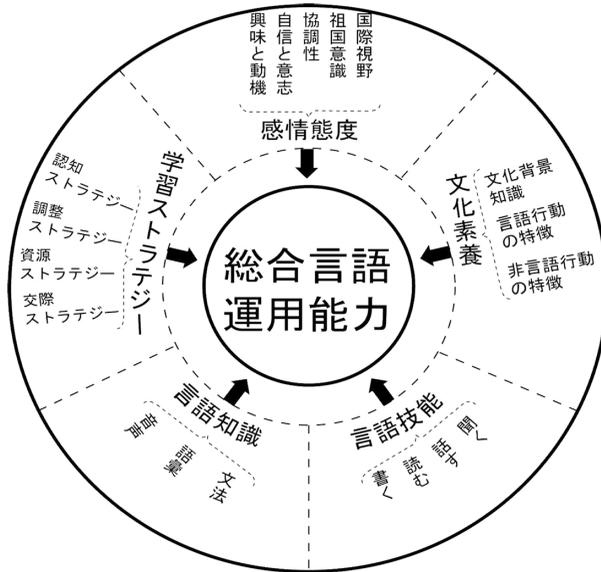


図1 『標準』日本語教育課程の目標の枠組み

2-2 二外としての日本語教育

大連市では2006年8月に二外の日本語教育の研修会である「大連中学校日本語教師研修会⁷⁾」が開催された。参加した教師から二外の日本語教育のめざすもの、意義、目的について以下の意見が出された（意見が重なるところも教師の考えの傾向を表すために載せてある）。

- ・二つの外国語を学ぶことの重要性。国際交流の促進、理解のために必要である。
- ・国際交流、人的交流を通して日本のことを知る。同じ地球の中で生きている人と人との交流を深めるため。
- ・子供たちのために日本語の楽しさを伝えたい。
- ・日本人の考え方を知り、視野を広げるためや就職のためにもいい。
- ・日本の文化や習慣を学び、視野が広まる。

- ・英語のほかにもうひとつの言語を学ぶことの大切さ。
- ・今の大学受験は日本語を歓迎しないが、日中友好のために必要だ。
- ・生徒に基本的な知識や技能を学ばせる。
- ・科学技術を学ぶ上でも日本語が必要。
- ・就職のために必要。

上記の意見を分析すると、二つの言語を学ぶことの意義、国際交流の大切さ、日本を知り視野を広めること、日本語を学ぶ楽しさを伝えたいことなどが挙げられる。また、科学技術を学ぶことや就職などの実用性を考えている教師もいることがわかる。

二外の日本語教育の持つ意義は何であろうか。大連の二外の教科書である『好朋友』1冊目のまえがきには、以下のように述べられている。

1. 多言語の能力を高め、国際理解教育を推し進め、21世紀の中学生が多文化を尊重し理解する態度を養う。そして、積極的に他者と交流する能力や国際的な視野を持てるように養成する。
2. 生徒の言語能力を育て、個性を高めることを促進させ、子供に生涯学習の基礎を打ち立てる。

(『好朋友1』2007、原文は中国語、筆者訳p10)

一外の指導要領である『標準』の教育理念は、二外に関して明確には述べられておらず、それぞれの学校の条件に合った形で進めているということになっている。一外の理念は二外も想定して策定されており、理念の上では共通している。素質教育を柱におき、「国際的な視野」を養成し、「個性の重視」や「国際交流」を推し進めること、「生涯教育の基礎づくり」をしていくことなどの理念は同じだといえる。

一外との違いは、学習時間数が一外は通常週5コマ（1コマは45分）であるのに対し二外は2コマ（学校によっては1コマ）で、一外は受験の対象科目になっていることである。二外は「地方課程⁸」あるいは「校本課程」

多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育—中国大連市における第二外国語としての日本語教育—として位置づけられており、基本的には選択科目である。そのためには、生徒たちに対して受験対象とは違った魅力あるものが必要になってくる。このことは大連の二外の日本語教科書作成にも影響を与えている。

二外としての日本語は英語のほかにもう一つの言語として設定されているが、日本や国外でも複数言語を学ぶ意義が提唱されている。

2001年に欧州評議会（Council of Europe）が打ち出した「ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages; CEFR）」においても、母語以外の2言語を学ぶ「1+2言語政策」が出され各国で推進している。これは母語と同様に他の言語が話せるようになることではなく、言語や文化の違う人々といかにコミュニケーションをはかっていくかという背景から生まれたものである。

また、TJFでは高校生に英語のほかにも中国語や韓国語朝鮮語などの隣国のことばを学ぶことをすすめている。「英語+1」、つまり複数のことばに触れることによって、「ことば」の持つ面白さや豊かさを感じ、直接その言語でコミュニケーションできる喜びや新鮮な驚きを味わうことにつながるとしている⁹。

大連市は国際都市として日本との交流が盛んに行われており、日本語の人材を必要としている。将来的には日本だけでなく、韓国やアジア、欧米との交流活動も増えていくことが予想される。このような状況にあって、将来を担う中学生が日本語を学ぶことによって国際意識を養うことは意義あることだといえる。

日本語を学ぶことは、自分とは異なる文化や考え方に触れ、他者に関心を持ち、他者の立場で考える機会を得ることである。日本語学習者にとって一番興味を持っていることは、同世代の人たちであるといわれている。どんな服装をしているのか、趣味は何か、さまざまな興味が湧くことであろう。その中で違うところや同じところを発見し、共感も生まれてくる。人は自分と異なったものに対して「変だ」とか「おかしい」ということがある。しかし、日本語を学ぶ中でさまざまな視点や発想に気づき、物事を

見る視点を身につけておけば偏見がなくなり、相手を理解し受け入れることができるのではないかと思う。そして、日本語学習を通して中国社会や自分の住んでいる大連の街、さらに母語である中国語を見つめなおし、豊かな人間性と感性を身につけていくのではないだろうか。二外の持つ意義はこのような可能性を広げてくれるものである。

3. 日本語教育の理念とキー・コンピテンシー

3-1 日本語教育の理念

21世紀は国を超えて人や物、情報が移動し、国際的な関係づくりやより緊密なコミュニケーション活動が必要になってくる。このことは地域社会においても同様で、大連の国際都市としての将来を見据えたとき、人と人を繋ぐ外国語教育の重要性が増してくる。大連では二外の日本語教育の理念として「人間関係の温暖化」と「多文化共生社会の尊重」を掲げた。

①人間関係の温暖化

中国社会では急速に経済が発展する中で、人間関係が希薄になってきたという指摘がある。21世紀を担う中学生が積極的に他者とコミュニケーションをはかり、人との関わりを持ってほしいという願いが込められている。「地球の温暖化は阻止しなければならないが、地球社会の人間関係の温暖化を促進していく」というものである。日本語は大連に住む人々の人間関係を深め、近隣諸国や世界に住む人々との関係性を築く上で重要な役割を持っている。

②多文化共生社会の尊重

日本語を学ぶことによって、異なる文化や異なる世界に目を向け、他文化を尊重する態度を養い、国際的に対応できる多面的な視野を身につけることが大切である。「国際都市宣言」(2006)をした大連において多文化共生社会を築いていく上で日本語教育の持つ意義は大きい。

3-2 日本語教育のめざすキー・コンピテンシー

日本語教科書『好朋友』は上記の教育理念にもとづいているが、それを達成させていく能力としてOECD（経済協力開発機構）のプログラム「DeSeCo¹⁰」（Definition & Selection of Competencies; Theoretical & Conceptual Foundations; コンピテンシーの定義と選択: その理論的・概念的基礎）の枠組みを取り入れている。その中で特に重要な3つの鍵となる力が「キー・コンピテンシー」（KEY COMPETENCIES; 主要能力）である。グローバル化社会を生きる上で、国や文化、分野、状況を超えてあらゆる個人が人生を成功させるために、共通して身につけるべき必要な能力のことである。DeSeCoプロジェクトでは以下のように分類している。

- ・ 自律的に活動する力
- ・ 相互作用的に道具を用いる力
- ・ 異質な集団で交流する力

上記のキー・コンピテンシーの枠組みの中心にあるのは、図2にあるように個人が相手の立場に立って深く考える「思慮深い」思考と行動することである。

キー・コンピテンシーが打ち出された背景として、グローバル化の中で社会は人間関係がより複雑化・個別化されており、異文化の人々などの他者との接触が増え、個人の属している国や地域を大きく超えている。しかも、テクノロジーが急速に変化しており、その変化への適応力が必要になってくる。

立田（2006）は監訳者の序文の中で、企業において仕事ができる人とはできない人との差異について、高い業績を持つ人を見ると、学問的なテストや学校の成績、資格証明書と人生の成功とはあまり相関関係が見られないとし、次のような行動特性があると述べている。

- 1) 異文化での対人関係の感受性が優れている。外国文化を持つ人々の発言や真意を聞きとり、その人たちの行動を考える。

2) 他の人たちに前向きな期待を抱く。他の人たちにも基本的な尊厳価値を認め、人間性を尊重する。

3) 人とのつながりを作るのがうまい。人と人との人間関係をよく知り、行動する。

(ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編著、立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』2006よりp8)

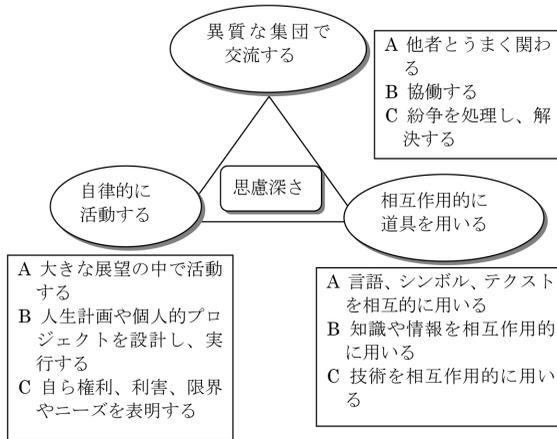


図2 DeSeCoの全体枠組み『国際文化フォーラム通信 no. 81』より¹¹⁾

キー・コンピテンシーの概念枠組みを大連の中学生に置き換えてみると図3が考えられる。国際都市大連の中学生が21世紀の地球社会で生きていくうえで鍵となる3つの力として、①言語、知識、情報、技術を活用する力 ②多文化社会において、さまざまな背景を持つ他者とうつき合う力 ③社会の一員として自律的に活動する力、が挙げられる。

グローバル社会にあって、大連における多文化共生社会に対応できる資質を形成していくうえで、このコンピテンシーは大きな意義を持つ。また、このことは大連の中学生だけでなく、普遍的な共通価値観として国を問わず必要とされるものである。このコンピテンシーを具体的な日本語教育の

多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育—中国大連市における第二外国語としての日本語教育—
 目標として、教育の枠組みの中に設定していくことが重要であるといえる。

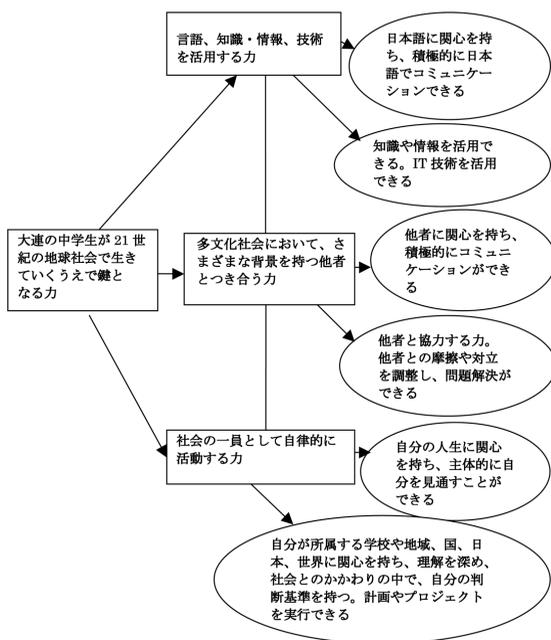


図 3 大連の中学生がめざすコンピテンシー¹²

4. 日本語教科書『好朋友』について

4-1 『好朋友』の編集体制

2006年11月に日中双方に編集委員会¹³が設置され、通常はメールや電話などでやり取りをし、年に数度合同編集委員会を開き、編集作業が進められた。中国側編集委員の中には、大連市の中学の現職日本語教師が含まれており、常に教育現場の情報や生徒たちの声が反映され、さまざまなアイデアを取り入れることができる。このことは教科書づくりをしていくうえで重要な要素である。

また、日本側編集委員会の事務局であるTJFは、これまで世界の小中高

における日本語教育の支援と国内の中高校の中国語や韓国語朝鮮語教育の支援とシラバスの作成に取り組んでおり、教科書を作成していくうえで大きな支えになっている。2006年11月から編集制作に取り組み、2009年に全5冊を完成させた。

4-2 教科書の構成

『好朋友』は102頁にわたるストーリー漫画を教科書の主軸におき、課程と付録の三つの部分で構成されている。ストーリー漫画を導入した理由は、日本の漫画は大連の中学生にも人気が高く、学習の動機づけを高めることができ、文化の学習にも効果的な面があるからである。そのほかにも漫画の効用として以下が考えられる。

- ①絵と日本語・中国語混在の台詞があるので、初級学習者にあっても、ストーリーや日本語の台詞などの意味を想像しようとしたり、その想像した意味を確かめようとしたりするなど自律学習を促すことができる。
 - ②ストーリーや絵から、登場人物の感情、文脈（ことばが使われる場面や状況）に即したことばを学ぶことができる。また、漫画に盛り込まれた文化事象や事物を理解することができる。
 - ③漫画のストーリーがそのまま学習活動の内容になるので、内容重視の学習活動が自然に展開できる。
 - ④漫画に出てくる台詞や擬音語・擬態語（ガチャ、ドキドキ、シーン等）が文字や生き生きとした日本語の学習に役立つ。
- （『国際文化フォーラム通信no. 87』 p2より）

図4にあるように漫画から各課のトピックにあたるコマを取り出し、その場面がどのような場面か想像をしたり、学習者が自分の日常生活や言語習慣を振り返ることによって学習動機を促し、自然に学習活動ができるよ

多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育—中国大連市における第二外国語としての日本語教育—
 うにしてある。学習活動はテーマを持った内容重視型で、各課の目標を達成するために、必要な表現や語彙を使いさまざまな活動ができる。文法説明については一切排除してある。「コラム」は各課のテーマやトピックと関連させて、豊富な写真を取り上げ、さまざまな視点から文化を取り上げることによって、多文化理解の資質を養う。「考えてみよう・言ってみよう」はイラストなどを使い学んだ表現が復習できる。「日本語広場」は「歌」や「顔文字」、「牛丼の作り方」などの日本文化に関することを楽しく学べる。「合作・交流・展示」は学習したことをもとに寸劇や自分たちのクラスの写真を撮って展示したりするなど、発信型の活動である。「付録」として日中対照の語彙や表現、連想を取り入れた五十音図などが配置されている。

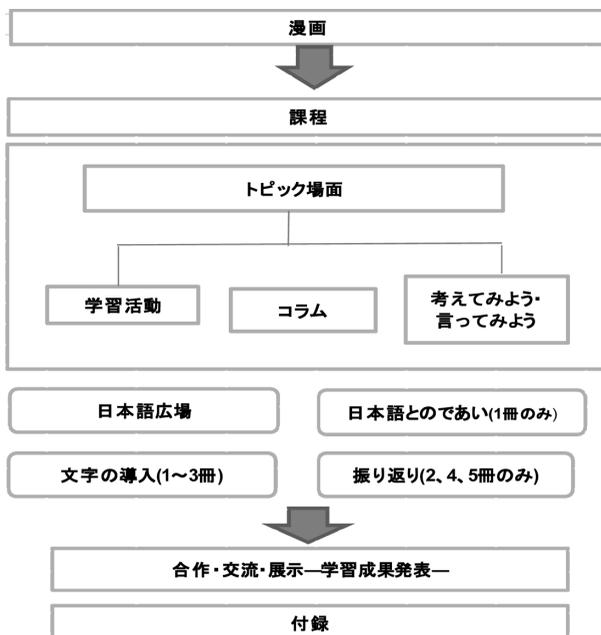


図4 『好朋友』の構成

4-3 人間関係を紡ぐ表現

人間関係を築いていくうえで、相手をほめることばや声かけ、相手への思いやり、励ましのことばが大切だと考える。クラスメート間で使うことばによって身近なところから自然に身につけることができる。そのことにより、社会の多様な人たちと人間関係を紡ぐことの大切さがわかってくる。

以下、代表的な表現を挙げておく。

1) 相手をほめる表現例

- ・そのかばん、かわいい。いいね。 - ありがとう。
- ・それ、かっこいいな。 - ありがとう。
- ・絵が上手だね。
- ・すばらしいね。
- ・すごい！

2) 相手を気づかう表現例

- ・どうしたの？ - ちょっと、悩んでいるんだ。
- ・大丈夫？ - ちょっと、頭が痛い。
- ・大丈夫？ - 大丈夫。

3) 一緒に遊ぶときの表現例

- ・いっしょにやらない？ - うん、やる。
- ごめん、やらない。
- ・入れて。 - いいよ。
- ・教えて。 - いいよ。

4-4 『好朋友』を使用した生徒・教師の感想

2009年6月に『好朋友』を使用している大連の日本語教師と中学生に1冊目に関するアンケート調査¹⁴が行われた。その中で以下の感想が出された。生徒には教科書のどんなところが好きか、教師には漫画が日本語学習にどのように影響を与えているかが質問された。

【生徒の主な感想】

- ・漫画を使って勉強するのはリラックスできる。
- ・漫画は直感的に紹介してくれるから、より理解しやすい。
- ・生徒にとって漫画は一般的に好きなので、もっと勉強に興味がわくようになる。
- ・漫画は面白いし、日本語も勉強できる。言葉が覚えやすい。
- ・漫画のストーリーが豊かで、実際に近い。
- ・(「日本語とのあい」) 最初は日本語がわからないので、まず最初に中国語と日本語の似ているところを想像することから始めたいと思った。
- ・(「学習活動」) 友達と実践しながら日本語を体験できる。知識を豊かにしてくれる。ゲームなどもできておもしろい。
- ・(「コラム」) 学習時間にリラックスした時間を与えてくれて、同時に日本の風俗礼節を知ることができる。世界各国の違う地域のことがわかる。
- ・(付録「友好を深める日本語表現」) 中日両国の友好的な発展を希望しているからこの表現が好きだ。勉強したあとで友達と話すことができる。

【教師の主な感想】

- ・生徒は漫画があることで教科書に親しみを感じているようだ。会話の場面の理解にも漫画は有効。教科書に漫画があるのは新鮮だ。
- ・生徒たちは漫画が好きで、多くの生徒は漫画を見てから日本語を勉強しようと思っている。漫画は学習への興味や関心を高めてくれる。彼らは漫画を見て自分が使いたいちょっとした言葉の意味の使い方などを教師に聞いてくる。
- ・漫画があると、生徒の日本語に対する興味を育てるだけでなく、勉強する内容を助けてくれる。漫画を介在させると、生徒はより直感的に日本語を感じることができ、学んだ日本語を正確に運用することができる。
- ・生徒たちは漫画がとても好きで、漫画を通して日本語を勉強すると、言葉が使われる場面が理解でき、単語や文もよく覚えられる。生徒の積極性が期待でき、単純な言語知識だけでなく、日本文化や民俗などを含め

た学びが可能になる。

- ・日本語に触れたばかりの子供たちにとって、興味を持つことは重要なことだ。漫画は子供の注意力をとともひきつける。生徒は漫画に親しむと同時に漫画から簡単なオノマトペや文化を知ることができ、生徒の日本語力を伸ばすのに助けになっている。漫画のストーリー構成があるので、子供に系統的な学習をさせるのに有効である。

アンケートは『好朋友』の1冊目を対象にしているが、生徒たちは好感を持って受け入れていることがうかがえる。漫画は大連の中学生にとって日本語学習の動機づけになっており、学習活動なども楽しく学べることを挙げている。一方、教師側も漫画が日本語学習に与える影響として、プラスに働き、日本語学習への動機づけになっていることだけでなく、生徒の積極性を引き出し、言語や文化面にも学びの効果も期待できるとしている。

5. まとめと今後の課題

21世紀に入り教育部が制定した日本語教育の指導要領『標準』により、日本語教育の理念や教科書は大きく変わってきた。しかし、現在、中学校における一外の日本語教育は、素質教育を掲げながら、現実には受験教育になっていることは否めない。文法中心になり、コミュニケーションの部分がおろそかにされることが多い。

一方、二外としての日本語教育は、コミュニケーション中心で文化理解、国際理解の要素も取り入れ、多様な視点を学ぶことができる。本来の日本語教育のあるべき姿だといえる。しかも、教科書として使用されている『好朋友』には文法の説明が一切登場しない。日本語に親しみ楽しく学べるように工夫されている。また、一外と違って試験を課す必要がない。試験のためではなく、日本語に触れ世界の中学生を知ることが、多文化共生を志向する社会にとって必要なことである。

中国では現在小学校3年生から外国語教育が導入されているが、英語が苦手な生徒にどのように指導したらいいか深刻な問題を抱えている。日本

多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育—中国大連市における第二外国語としての日本語教育—も同様でBenesse教育開発センターの調査¹⁵によると、英語を苦手と感じている生徒は約6割で、しかも、そのうち8割が中学1年の後半で苦手と感じるといふ。大連市は英語が苦手な生徒のことを考慮し、日本語を学ぶ機会を与えている。その生徒にとって日本語が好きになれば外国語科目の一つとして日本語を学び、将来社会に貢献できる可能性もある。二外の日本語教育がこの役割を果たす端緒になることも考えられる。

また、英語が得意でさらにもう一言語を学びたい生徒もいる。英語以外の外国語に触れることによって、ことばや文化の持つ多様性を知り、他者の視点を持つことができる。自分たちと交流する相手の母語を学ぶ意義は大きいといえる。

2010年8月、中国瀋陽市で中高校の日本語教師を対象に二外としての日本語教育のワークショップが開催された。東北三省（遼寧省・吉林省、黒龍江省）から参加し、『好朋友』の使い方を中心にワークショップが行われた。大連だけでなく他の地域においても二外の日本語教育が広がっている。

しかし、受験や文法中心の日本語教育を担当してきた教師にとって、二外としての教育は初めてである。現場の教師たちにとって『好朋友』の使い方がよくわからないという声もある。二外の普及にともない『好朋友』のワークショップを開催していくことが急務である。

さらに、今後問われてくることは、二外の日本語レベルの到達点である。「Can-do¹⁶」指標の確立も必要になってくる。『好朋友』の5冊目が中学3年生前期という設定で作成されたが、さまざまな使い方が考えられる。二外を開設している学校間で、教学に関する交流を増やし、意見交換をしていくことが望まれる。

今後、中国の中高校の一外としての日本語学習者数は、減少の一途をたどることが予想される。中高校の外国語教育の中に日本語が残るとしたら、二外以外にないであろう。その意味で二外の日本語教育の持つ意義は重要である。

注

- 1 (独) 国際交流基金は2009年9月より2010年1月にかけて、機関で学ぶ世界の日本語学習者数の調査を実施した。
- 2 (独) 国際交流基金日本語国際センター (2002) 『日本語教育国別調査 中国日本語事情』
- 3 大連市教育局文件「关于在中小学加强日语教学的意见」大教 [2006] 39号
- 4 中等教育の改革によって実施された学校独自で学習内容を定める課程のこと。
- 5 2001年に中国の教育部が制定した中学校の日本語教育の指針を示した指導要領。これに基づいて検定教科書の編集が行われる。
- 6 受験に偏った教育でなく、各生徒の個性を生かし、徳育・知育・体育・美育・労育すべてにわたってそれぞれの資質を伸ばしていく教育。
- 7 大連教育学院とTJF主催で2006年8月に二外の日本語教育をめざして実施された研修会。筆者も本研修会に講師として参加した。
- 8 2001年から実践された基礎教育改革によって省、市、県などの各地域で定める課程のこと。
- 9 TJF『国際文化フォーラム通信』No.83
- 10 1997年末にスタートし、2003年に最終報告。国際的な生徒の学習到達度調査 (PISA) の概念枠組みの基本になっている。
- 11 前出、立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー 国際標準学力をめざして』から作成
- 12 『好朋友』日本側編集委員会で作成したものをもとに筆者が作成。
- 13 中国側は大連教育学院に編集委員会 (主任張涛) を設置し、大連市の中学校の日本語教師などが編集委員に加わった。日本側編集委員会 (主任加納陸人) はTJFに設置され、2名の編集委のもと編集作成が行われた。漫画はプロの漫画家が描いている。
- 14 全豪現代言語教師連合研究大会 (2009.7) で研究発表者 (藤光由子・中新井綾子・大船ちさと・楊慧) が発表のためにとったアンケートをもとにしている。アンケート数は生徒25名、日本語教師11名の中から作成。原文は中国語。
- 15 2009年1月～2月にかけて全国の中学2年生2,967名を対象に中学生の英語学習の実態と英語や外国に対する意識の調査が実施された。
- 16 前出のCEFRでは、2001年にその言語を使用して「何ができるのか」の能力記述文 (Can-do statements) を開発した。大連においても「Can-do」をもとにした指標が求められる。

参考文献

- 国際交流基金日本語国際センター (2002) 『日本語国別調査 中国日本語事情』国際交流基金
- (財) 国際文化フォーラム (2008) 『ことばと文化2 小中高校生の相互理解をめざし

多文化共生と人間関係を紡ぐ日本語教育—中国大連市における第二外国語としての日本語教育—

て 国際文化フォーラム20年の歩み』

(財) 国際文化フォーラム (2007.1) 『国際文化フォーラム通信no.73』

(財) 国際文化フォーラム (2009.1) 『国際文化フォーラム通信no.81』

(財) 国際文化フォーラム (2010.1) 『国際文化フォーラム通信no.85』

(財) 国際文化フォーラム (2010.7) 『国際文化フォーラム通信no.87』

佐久間勝彦 (2002) 「第二外国語としての日本語教育について」『国際交流基金バンクック日本語センター紀要』第5号 11-20

ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編著、立田慶裕監訳、今西幸蔵他訳 (2006) 『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』(D.S.Rychen & L.H. Salganik eds, “Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society”) 明石書店

吉島茂・大橋理枝訳・編他 (2004) 『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 Common European of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment』朝日出版

大连市教育局 (2006) 「大连市教育局文件大教 [2006] 39号 关于在中小学加强日语教学的意见」

大连教育学院编 (2007) 『第二外国語 (日语) 读本 试行版 好朋友1』外语教学与研究出版社

大连教育学院编 (2008) 『第二外国語 (日语) 读本 试行版 好朋友2』外语教学与研究出版社

大连教育学院编 (2008) 『第二外国語 (日语) 读本 试行版 好朋友3』外语教学与研究出版社

大连教育学院编 (2009) 『第二外国語 (日语) 读本 试行版 好朋友4』外语教学与研究出版社

大连教育学院编 (2009) 『第二外国語 (日语) 读本 试行版 好朋友5』外语教学与研究出版社

中华人民共和国教育部制订 (2001) 『全日制义务教育 日语课程标准 (实验稿)』北京师范大学出版社